

# 米大学 野球留学の道

## vol.3

### College Baseball in the USA



# 野球を武器に 未来を広げる

Profile ● 上野大輝 (うえの・たいき) 1990年5月17日、群馬県館林市出身。20歳。館林四中の野球部で軟式を本格的に始める。太田市高では1年秋に左翼のレギュラーをつかむ。2年春は1番・遊撃で県準優勝、関東大会出場。3年夏は左翼手で県18強。昨年2月に米2年制大学4校のトライアウトにすべて合格し、同年8月にアリゾナ・ウエスタン大に入学。背番号8を付け二塁、遊撃をこなす。今年8月からは米カリフォルニア州のマーセッド大でプレー。176cm、77kg。右投左打。

解説 アリゾナ・ウエスタン大ほど投手が多くない大学でも、投手兼野手もしくは内外野を守れるなど、複数ポジションをこなせる選手は有利。捕手は2人をローテーションで起用することが多く、アリゾナ・ウエスタン大は打力重視の傾向だが、守備力を求めるチームもある。

手、外野手は打力重視。特に二塁手と外野手の控えは打要員となるため、打率より長打力で選出された印象を受けました。ロースター24人のうち、投手が半分の12人(内野兼任3人、外野兼任2人を含む)。投手を兼ねない内野手は6人(うち一塁手2人)、外野手は4人でした。

前期試験を終え、冬休みに入ると、規則で部活動ができないため日本に一時帰国し、年末年始は母校などでトレーニング。年明けに再渡米すると「リーグ戦は二塁手で行く」とコーチに告げられました。それまでほとんど遊撃だったのが不安でした。1月29日にリーグ戦が開演しましたが、レギュラーシーズンは5月1日まで計56試合。基本的にホームアンドアウェイで、ほとんどがダブルヘッダーでした。多い週は試合が3日もあり、覚悟はしていたのですが、遠征は想像以上にきつかったです。すべてバス移動で、近くて約2時間半。遠いところは7、8時間かかりました。試合開始時刻が早い場合は、前日の練習後に移動しました。ホテルはツインの部屋に3、4人が泊まります。食事はサンドイッチ、クッキー、りんご、スポーツドリンクといったものが配られ、朝と昼に分けて食べなければいけませんでした。



解説 サンフランシスコから北西へ車で約3時間の街、マーセッドにあるコミュニティー・カレッジ。野球部はカリフォルニア・コミュニティー・カレッジリーグのセントラル・バレー地区に所属。エンゼルス系のクローザー左腕、ブライアン・ファンテスら多くのメジャーリーガーを輩出。愛称はブルーデビルズ。

上野さんが再挑戦するマーセッド大も専用球場がある素晴らしい環境

解説 投手は完全分業制で投球数を抑えるうえに、アリゾナ・ウエスタン大は地理的な理由によりリーグ戦はダブルヘッダーが原則で弱攻が必要になるため。他の大学は10人以下。

ことが反省点です。

帰国後、冷静に振り返ってみると、パワーでは勝てなくても技術は劣っていないと感じました。守備の確実性、送りバントやセーフティーバントは日本人の方が上です。さらにタイミングを外されてもヒットにしたり、内野安打にしたりできる選手はチームにいませんでした。バットさばきは日本人の方がうまい。投手も球速では負けても、制球力と緩急をつけた投球術で勝てると思います。米国の野球に触れ、米国方式を取り入れながら、日本人の武器を最大限に生かすことで、道は開けると確信しました。また、二遊間を組んだピンセント・ザスタがMLBドラフトでオリオールズから指名(27位)されたことは、少し自信になりました。

途中帰国したままでは終われませんので、7月末に再渡米しました。今年度はカリフォルニア州のマーセッド大で再挑戦です。私が2年制の大学でプレーできるのは、あと1年だけ。昨年度の経験をすべて生かしてロースターに入り、今度こそリーグ戦で成績を残して来年度は4年制大学に編入して野球を続けることが目標です。そのためには英語力も上げないとダメです。頑張った先に、どんな世界が広がるのか。楽しみです。(終わり)

解説 野球で認められ4年制大に編入する場合、語学プログラムを卒業して米国人学生らと同じ課税を受けなければ編入テストは受けない。大学によっては2年制大で一定の取得単位数を求められることがある。野球で複数選手が同レベルと判断された場合、学力成績の高い選手から編入できたり、奨学金を得られるため、学業は重要。

解説 規定によりリーグ戦出場は2年制大が2シーズン。4年制大は4シーズンだが、2年制大でのシーズンもカウントされる。アリゾナ・ウエスタン大で1シーズン登録された上野さんがマーセッド大でリーグ戦に出場できるのは1シーズンのみ。4年制大に編入すれば、さらに2シーズン出場可能。ちなみに日本の大学でリーグ戦に出場した分もカウントされる。



アリゾナ・ウエスタン大のピンセント・ザスタ遊撃手はMLBドラフトでオリオールズから指名された

米大学野球留学に関する問い合わせ先 TEL.03(3230)0036 アスリートブランドジャパン株式会社 (<http://www.athlete-brand.com/>)

# 未来を広げる

解説 入学前の準備として6月から約2か月間で1チーム40~50試合(ホームアンドアウェイ)するサマーリーグに参加する方法がある。米国の生活、野球、遠征、野球英語などを体験できる。参加費用は滞在費、遠征費を含め約5000\*。(約50万円=米国内への渡航費、食費は別)。

12月の第1週に24人のロースター入りを知らされ、ホッとした。打率のランキング表が配られ、350で5番目。土、日曜の練習試合だけでなく、水、木曜の紅白戦の成績も含まれていました。9月から約3か月間の実戦が、すべて評価の対象だったわけですが。選考は基本的に結果重視。残れたから良かったものの、日本からの留学生は、入学前に準備をしっかりと、生活やチームに早く順応することが重要だと改めて感じました。

自分では350もの打率を残していた実感はなかったのですが、四球が多かったことで数字が上がら、評価につながったのではないかと分析しています。捕手、一塁

## バスで7~8時間の遠征は過酷

解説 リーグ戦出場登録選手。年度始めは40人前後の部員が約3か月で25人前後に絞り込まれる。一般的にロースターから落れた者は年度内の野球部員としての活動ができない(一部の大学では練習生として部に残れる)。ただし学校には残れ、翌年度の再挑戦は可能。

## 日本人の優位性を確信し再挑戦

開幕当初はダブルヘッダーの第1試合に2番一塁で先発出場し、もう1試合は守備固めなどで途中出場していました。やがて8番になり、その後はスタメンを外れ、だんだん出場機会が減っていききました。原因は打撃不振。留学してからコーチの勧めで打撃フォームをノーステップに変えたことで、ロースター争いでは結果を出すことができず。しかし、リーグ戦に入ってから変化球に対応できなくなったため、修正を繰り返すうちに迷宮に入り込んでしまいました。体調を崩したことも重なって精神的にも行き詰まり、悩んだ末、4月に帰国を決定しました。スランプ時の対処法、ストレス解消法を持っていなかった

# どこまで野球をつづける?

how to keep playing baseball



グレンデール戦で三塁に進み、ベースコーチの指示を聞く上野さん

「米大学留学の道」は今回が最終回。米アリゾナ州ユマのコミュニティー・カレッジ(2年制の公立大学)、アリゾナ・ウエスタン大で09~10年シーズンのロースター(リーグ戦出場登録選手枠)入りを果たした上野大輝さん(20)に、ロースター争いとリーグ戦の経験、反省点、日本人選手の可能性などを語ってもらった。解説は、今回もスポーツ留学をサポートするアスリートブランドジャパン社の根本真吾代表にお願いした。

## 米大学野球の1年

